

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370961

研究課題名(和文) インドネシアのアブラヤシ農園労働者をめぐるヘゲモニー関係の研究

研究課題名(英文) Study of Hegemonic Relation of Oil Palm Plantations in Indonesia

研究代表者

中島 成久 (NAKASHIMA, Narihisa)

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号：80117184

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：パーム油関連産業を上流と下流の段階まで俯瞰しながら、生産現場でのヘゲモニー状況の研究を目指した。インドネシア、西スマトラ州におけるパーム産業の歴史を概観し、3つの農園におけるヘゲモニー状況を比較検討した。

パーム農園労働者としてニアス人が最も好まれている実態を明らかにした。彼らは会社に忠誠を誓う移住民の一般的特性と、民族間序列の最底であるという彼らのサブアルタンの社会的属性を解明した。

研究成果の概要(英文)：I have concentrated on doing research of the hegemonic relation among the plantation workers of three oil palm plantations in West Pasman District, West Sumatra, Indonesia.

It was impressive that the Nias migrants were most popular among those workers. I have concluded that this preference of the Nias migrant workers were explained from the fact of their subaltan charactersitics, that they were placed at the lowest status of the ethnic hierarchy as well as the royalness to the companies of the migrant workers in general.

研究分野：文化人類学

キーワード：アブラヤシ パーム油 労働者 ヘゲモニー ニアス人 西パサマン県 西スマトラ州 インドネシア

1. 研究開始当初の背景

アブラヤシ開発に伴う土地紛争を研究していて紛争のキープレーヤーとして移住民が占めていることに気づき、移住民労働者の社会的意味を研究する必要性を痛感した。また、インドネシアだけではなく、マレーシアにおけるアブラヤシ開発に関する問題を、川下から川上までの生産と消費に関わる全過程について詳細に検討する必要性を痛感した。

そのためにグラムシの社会理論の中核に位置するヘゲモニー理論をアブラヤシ産業にも応用し、全過程におけるヘゲモニー論的關係性を明らかにすることが肝要であると思いついた。

2. 研究の目的

インドネシア、西スマトラ州、西パサマン県のパーム農園では、ニラス人労働者が最も好まれていて、なぜ彼らはパーム農園でそれほど労働者として選好されているのか、その背景は何かを究明することを目指した。

その背景を明らかにすることで、グラムシのヘゲモニー理論が適用されることを確信した。

西スマトラ州におけるヘゲモニー関係とは、国家、州政府、県、郡、そしてナガリと呼ばれる村(母系慣習村であると同時に西スマトラ州の行政の最小単位)にまで至る行政システム。それから、村を単位とするミナンカバウの慣習法共同体。

さらに、アブラヤシ開発資本としてウィルマー・グループ(本社はシンガポール、東南アジア最大のアグリビジネス)、それに国营第6農園。

こうしたなかで、資本側に土地を提供したミナンカバウ母系共同体土地提供の代価としてプラスマ農園を提供された小農(独立自営農民、インドネシア語で Swadana Murni と呼ぶ)、さらに、移住民(ジャワ人、バタック人、マンダイリン人、そしてニラス人など)の存在。

こうした輻輳する関係性のなかで、アブラヤシ生産現場で起きている現象を解明することを目指すことで、アブラヤシ・プランテーションにおけるヘゲモニー関係を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

土地紛争の研究で知己の多い、二つの民間農園と、同じ地区にある国营第6農園の3つの農園(ウィルマー・グループ)におけるニラス人労働者の実態を比較検討した。

ニラス人労働者を中心として、アブラヤシ農園における現場作業を担っている移住民労働者の労働の実態と彼らの待遇、不満、要望などを聞き取り調査した。

また、1990年代半ばからパサマン山(海

抜2900メートル)の山麓部に広がる広大な保護林帯に入植したニラス人スクウッターと他の民族集団の違法入植の実態を明らかにした。そのうえで、他の民族集団の存在はまったく問題視されなかったのに対して、一人ニラス人スクウッターだけが、2010年に地元のミナンカバウ人に襲撃されるという事件があったが、その背景分析を行った。

4. 研究成果

アンソニー・グラムシのヘゲモニー理論を手がかりにして、アブラヤシ農園労働者の実態を明らかにしようとした。ヘゲモニー関係論によって、移住民労働者が大農園(ウィルマー・グループのような民間資本であれ、国营第6農園のような国营資本であれ)において選好されることは、彼らの根なし草性が農園労働者としては好都合であるからであることがわかった。土地を持たない彼らは、必死に仕事を求めている、それだけ会社に忠誠を誓い、理不尽な要求や待遇にも耐えられると判断されている。

アン・ストーラーが北スマトラプランテーション地帯の研究で明らかにしたように、アブラヤシ農園においては、「威嚇」の体系がすべてを支配している。農園労働者の待遇は悪く、理不尽な待遇がまかり通っている。そうした待遇に不満を述べれば、「仕事を選ぶのか、それともクビになりたいのか」という殺し文句が発せられ、労働者は沈黙を強制されている。

プランテーション労働者全般に通じるこうしたヘゲモニー関係は、ニラス人スクウッター排撃事件で一気に先鋭化した。グラムシ理論のなかで、サバルタンという概念があり、まさにその観点からこの事件を扱うことが肝要であることを見出した。サバルタン研究の一課題として、西スマトラ州に多数移住してきたニラス人労働者の存在を分析できることを明らかにした。

一般的に、インドネシアにおけるアブラヤシ農園の労働者としてジャワなどからの移住民が多く利用されているが、西スマトラ州では移住民の比率が他の州と比べて低く、プラスマと呼ばれる小農がアブラヤシ農園に土地を提供し、開発された土地の50%をプラスマ農民が受け取るというケースがもっとも多い。

一方、大規模農園では地元のミナンカバウ人はほとんど雇用せず、移住民を利用することが多い。そうした移住民のなかでも、ニラス島出身者がもっとも好まれるのは、彼らが、ニラス島というインドネシアの民族集団の中でもっとも劣位に位置づけられる彼らの属性に由来する。プリプミというインドネシアの「土地の子」のなかでも、民族関係のペッキング・オーダー的な序列関係性が見出される。ニラス人はプリプミのなかでも最底辺に位置づけられている。

さらに、サバルタンという概念はスピバツ

クの『サバルタンは語れるか』という著書のなかで、サティと呼ばれるインドの寡婦の殉死をめぐる習慣のポストコロニアリズム・フェミニズムのなかで用いられたことで有名になったが、スピバック的な意味での用法はここでは用いない。

ニラス人労働者はニスマトラ州だけではなく、北スマトラ州でも非常に多いことが報告されているが、その実態を明らかにすることが次の課題として浮上している。

また、カリマンタンではスマトラと異なっており、小農の割合が少なく、大規模農園が地元の人から土地を収奪するケースが多く、土地を失った人が農園の労働者として利用されるケースも多い。そうした意味で、農園労働者をサバルタン研究の観点からみていくと、インドネシアにおけるアブラヤシ農園の特徴がさらに見えてくる。

このような意味において、本研究の結果、グラムシのヘゲモニー理論、サバルタン研究などの概念を援用することで、さらに広い文脈からアブラヤシ・プランテーションの研究を行うことの重要性を見えてきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

1 2017年4月

中島成久、査読無し

アブラヤシ・プランテーション労働者をめぐるヘゲモニー関係、『異文化論文編』第18号、121-157頁

インドネシアにおけるアブラヤシ開発の歴史をマレーシアにおける歴史と比較しながら概観し、インドネシアでは1990年代から外国資本による投資が可能になり、急速にパーム産業が普及していった実態をまず指摘した。

その根幹は民間であれ国営であれ、中核となる大農園とその周辺に小農(インドネシア語ではPlasma)が位置付けられている。小農は大農園に土地を提供し、パーム農園として開発された土地の提供を大農園から受け取るが、問題は小農の農園労働をだれが担うかという問題である。

インドネシアでは往々にして大農園が小農に当初約束していた土地の分配を行わないことが多く、それが土地紛争の原因となっている。そのため、大農園では地元の住民を自らの農園の労働者として雇用するのではなく、土地がなく、仕事を求めている、勢い会社に忠誠を誓う移住民を雇用するケースが多い。

西スマトラ州ではなかでもニラス人を雇用するケースが多い。ある農園では農園労働者の70%をニラス人が占めていた。

元来ニラス島は貧しく、19世紀以来豊かな生活を求めて移住者として出ていく歴史があるが、インドネシア独立後も「プリブミ」のなかでも最底辺に位置づけられてきた。

そうしたニラス人の社会的劣位、従属性、あるいはサバルタンの特性がパーム農園労働者として選好される背景に存在する。

主要参考文献

中島成久

アブラヤシ・プランテーションをめぐる権力関係 ウィルマー・グループ、国営第IV農園、民衆農園における労働者の管理、「異文化」(論文編)第14号、2013年4月、103-148頁、法政大学国際文化学部紀要

ストーラー、アン・ローラ

『プランテーションの社会史、デリ/1870-1979』中島成久訳、法政大学出版局、2007年

スピヴァック、ガヤトヤ

『サバルタンは語ることができるか』植村忠男訳、みすず書房、1998年、原著(1988年)

2 2016年12月

中島成久、査読有

開発で危機に瀕するクリンチ・スプラット国立公園、「インドネシア ニュースレター」93、日本インドネシア NGO ネットワーク(JANNI)、14-35頁

以下の3で詳述した保護林への不法入植問題がアブラヤシ開発のなかで頻繁に起きている事実があるので、その実態を解明すべく予備調査を実施した。

西スマトラ州、ジャンビ州、南スマトラ州、ベンクルー州の4州にまたがるクリンチ・スプラット国立公園は138万平方キロメートルの広大な国立公園であるが、近年の開発と1999年以降の地方自治時代の地方政治の在り方のなかで、大きな影響を蒙っている。

海拔300-3805メートルの高度に位置するこの公園(KSNP)には、スマトラトラヤゾウ、バク、サンバルシカなどの野生動物のほか、鳥類や独特の植物相が知られている。

しかし、国立公園の設定が住民の生活とは無縁の会議で決められたため、その境界が定かではなく、しばしば住民の住む村が公園の中に深く入りこんでいた。そこで、バッファー域を設定し、経済活動と公園保全との調和を図ろうとしているが、開発の圧力の前にすでに50%のバッファー域は開発されているといわれている。

さらに、地方分権時代の始まりとともに、財源を手にした地方政府は森林からの収入を当てにして森林伐採を行っていて、なかには違法伐採に通じている。そうした開発の一環なのが、KSNPとその外部を結ぶ横断道路の建設計画である。急峻なこの地と外部を結

ぶ道路は現在 2 本しかないが、そこでも道路の浸食は起きている。さらに数本の道路が建設されるならば道路周辺の環境は一気に悪化するし、違法伐採、密猟などの活動を助長しかねない。

KSNP の中心部にあるクリンチ盆地は公園域外だが、人口増加のため公園域に違法にはいる住民が跡を絶たないが、問題なのは、彼らの背後に地方政治家がいることである。

クリンチ盆地は海拔 700 メートル以上なので、アブラヤシ栽培には向かないが、公園の外延部ではそれまでのゴム園をアブラヤシ農園に切り替える動きが急で、一部は公園内部にも入りこんでいる。

こうした状況を深く考える必要がある。

主要参考文献

Edi Purwanto, An Anti-encroachment Strategy for the Tropical Rainforest Heritage of Sumatra: Towards New Paradigms, Tropenbos International Indonesia, Bogor, 2016, p14.

Raleigh A Blouch, Zoning for People Within Indonesia ' s Kerinci Seblat National Park, Journal of Sustainable Forestry, 14 July 2010

<http://gondrezt.blogspot.jp/2009/09/50-persen-hutan-penyangga-taman.html>

Allen J. Hollenbach, Promise or Peril? The Fate of Indonesia ' s Protected Areas in an Era of Decentralization, Journal of Development and Social Transformation, PP79-84

Keith Bettinger, Death by 1,000 Cuts: Road Politics at Sumatra's Kerinci Seblat National Park, Conservation and Society, Vol 12 No 3:2014

Sria Darma Tarigan, Sunarti, Suri Widaliza, Expansion of Oil Palm plantation and forest cover changes in Bungo and Merangin Disticts, Jambi Province, Indonesia, Procedia Environmental Sciences 24 (2015), 190-205

3 2016 年 4 月

中島成久、査読無し

ニアス人スクウォッター焼き討ち事件
インドネシア、西スマトラ州西パサマン県の事例より、『異文化論文編』第 17 号、法政大学国際文化学部紀要、205 ~ 232 頁

1990 年代半ばから西パサマン県の国営第 6 農園の元労働者であるニアス人がパサマン山麓部の海拔 250 メートル付近の保護林帯の中に違法入植を始めた。あるいはミナンカバウ人女性と結婚したあるニアス人男性が

帰郷後数家族を連れて山麓部付近に住み始めたが、次第に保護林帯内に入り始めた。また他のエスニック集団の人々も違法入植を始めた。

彼らは換金作物を育てるほか、保護林帯の中にまで拡大してきた周辺部の小農のパーム農園の収穫労働にも従事していて、地元経済という観点では補完関係にあった。

しかし、2009 年のインドネシアの総選挙の年に、そうしたスクウォッターの投票権をめぐって地元のミナンカバウ人の中では反対する雰囲気広がった。しかし、彼らの投票権は認められ、特に県長選挙では 15,000 人余りのニアス人の投票行動が結果を作用した。

しかし、ニアス人票をある候補者に投票するよう大きな貢献をしたあるニアス人は彼の貢献にふさわしい見返りが無いとの理由で当選した候補者の悪口を広めると、それを引き金に違法入植を口実とした暴力的な排斥事件へと発展していった。

この事件はニアス人労働者のマージナリティが地方選挙という政治的利害の絡む地方政治の枠組みの中で暴力的な手段で明るみに出されたものである。

主要参考文献

中島成久

『インドネシアの土地紛争 言挙げする農民たち』創成社新書、2011 年

Anatona,

“Perdagangan Budak Pulau Nias 1820-1860, Tesis S2 Program Pasca Sjana Universitas Gadjah Mada, unpublished.

Reid, Anthony

The Pre-colonial Economy of Indonesia, Bulletin of Indonesia Economic Studies, 1984, pp154-55, 1984.

〔学会発表〕(計 3 件)

1 2016 年 7 月 28 日

NAKASHIMA, Narihisa

The Exclusion of Nias Squatters in West Sumatra, a proceeding of the 6th International Symposium of Journal of Anthropology Indonesia, 26-28 July, 2016 in Depok (University of Indonesia), Indonesia (not published)

(この英文の原稿をネイティブにチェックしてもらい、改題して今年度中に発表する予定である)

2 2016 年 7 月 16 日

中島成久

アブラヤシ・プランテーション労働者をめぐるヘゲモニー関係、日本国際文化学会第 15 回全国大会、早稲田大学

3 2015年1月10日

中島成久

インドネシア、西スマトラ州のアブラヤシ農園におけるニアス島人労働者

会場：東京大学駒場キャンパス 16号館 1階 107専攻第一会議室

第46回アブラヤシ研究会

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

中島成久

NAKASHIMA, Narihisa

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号：80117184